

郷土資料館の

お宝探訪



不思議な天体現象・オーロラを記録した『御月見日記』

郷土資料館の大事な仕事のひとつに、播磨町の歴史を彩る様々な資料の収集や保管があります。本年度は、数ある資料館の収蔵品のうち、代表的なものを紹介していきます。広報はりまの掲載月にあわせ、関係資料を展示します。ぜひ本物を見に来てください。

播磨町郷土資料館 ☎079(435)5000

『御月見日記』は、かつての野

添村川端地区（現在の南大中1・2丁目付近）で、代々の村役を勤めた人が、江戸時代の享保5（1720）年から明治30（1897）年までの約180年間にわたって書き続けた記録で、今から30年ほど前に発見されました。

『御月見日記』というタイトルは、旧暦の正月15日（または14日）の満月の月の入りの方向（たいていは蓮花寺周辺に沈む）によって行われた月占いが、各年の初めの部分に書かれているからです。

その後、その年の当時の農民にとって重要な関心事であった天候、肥料の値段などの物価、作物のでき具合、近隣の村や全国の出来事など、生活に係る情報などが書かれています。こうした江戸時代の庶民の生活や社会の動き

などを、長期間にわたって書きとめた記録は大変珍しく、貴重な資料であることから、平成10年に播磨町の文化財に指定されています。

さて、『日記』には興味深い出来事が数多く書かれています。江戸時代の人々が見た不思議な天体現象のうち、オーロラの出現のことが、わずか30数年の間に3回（1735、1737、1770年）も記録されているので紹介しましょう。

そのうちの1回、明和7年7月28日（1770年9月17日）のオーロラ出現について紹介します。明和7年の記録には「夜四ツより寅ノ方ニ当リ火事之様ニ少ヤケ」と書かれています。午後10時ごろから北東の空が火事のように赤く焼けたようになり、その後、北西さらに東へ移り、ついには空全体に広がったようです。記事の最

後には、こんな現象があるときは雨が少ないと昔から言われていると結んでいます。

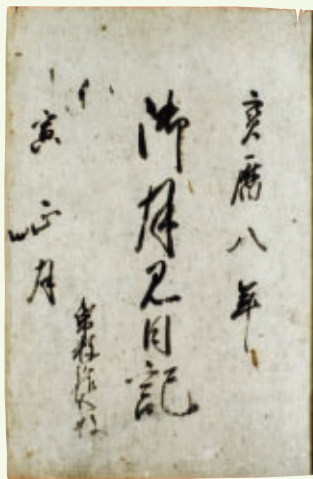
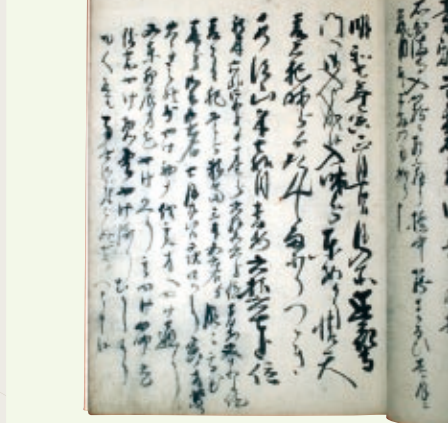
日本でのオーロラの観測は、古くは620年に見えたことが『日本書紀』に書かれています。しかし、この明和7年のオーロラは日本で最もよく見えたもので、北海道から長崎までの全国各地で観測されたようです。有名な国学者の本居宣長も日記の中で、この夜のオーロラのことを書いています。

めったに遭遇できないオーロラのほか、ほうき星（慧星）や日食についての記録もあり、野添の人たちの不思議な天体現象についての関心の高さをうかがい知ることができます。

「お詫びと訂正」7月号の本文において承応3年の西暦が間違っていました。正しくは承応3（1654）年です。お詫びして訂正します。

播磨町郷土資料館 館長 井守徳男

播磨町のホームページ <http://www.town.harima.lg.jp>
Eメール kikaku@town.harima.lg.jp



▲オーロラを記録した明和7年の記（左）と『御月見日記』上巻の表紙（右）

町の人口 7月1日現在

(住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,763人(+37人) 男…17,064人(+18人) 女…17,699人(+19人) 世帯数…14,116世帯(+20世帯)

